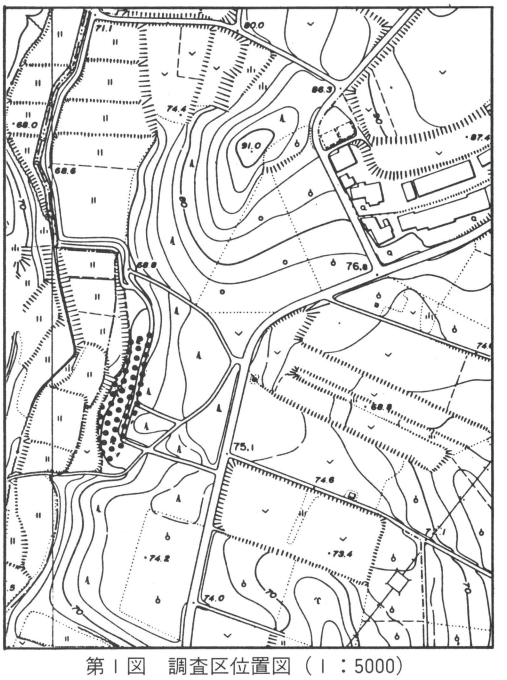
黒笹(くろざさ)40号窯跡・黒笹89号窯跡

調査の経過

西加茂郡三好町に所在する黒笹40号窯と黒笹89号窯は、大山と呼ばれる標高117.5ｍの丘陵から派生する４つの支丘上の一つの米ヶ廻間谷の東斜面の中腹に位置している。この二つの窯は、昭和31・32年にかけて愛知用水工事に伴う古窯跡の調査として名古屋大学考古学教室を中心にして発掘調査が実施された。その成果は、「愛知県猿投山西南麓古窯跡群」（昭和32年・３月、昭和33年・３月）として愛知県教育委員会より刊行されている。今回は県道豊田知立バイパス建設に伴う調査として実施した。調査は平成４年10月から平成５年１月までの期間で、窯体については再調査となったが2100㎡を調査した。（野本欽也）

調査の概要

米ヶ廻間谷の東斜面に南北に長い調査区を設定した。窯体が立地する東側の林道より上は開削のため平坦面となっている。窯体の下部には側溝が通り、黒笹89号窯の一部がこの側溝により壊されていた。側溝下は水田である。側溝の断面に昭和31・32年調査時の埋め戻し灰層が露出していた。灰原部分は両窯ともに水田化の時と発掘調査時の２度に渡って掘り返されており、攪乱層となっている。黒笹40号窯・89号窯ともに前回の調査以降の保存状況はきわめて良く、今回改めて窯体実測及び窯体の断ち割りを行った。窯体以外の遺構として、黒笹40号窯の南側上部で平坦な面を、北側で焼土跡を２ヶ所確認した。黒笹40号窯と黒笹89号窯の距離は20ｍ程である。



第１図　調査区位置図（１：5000）

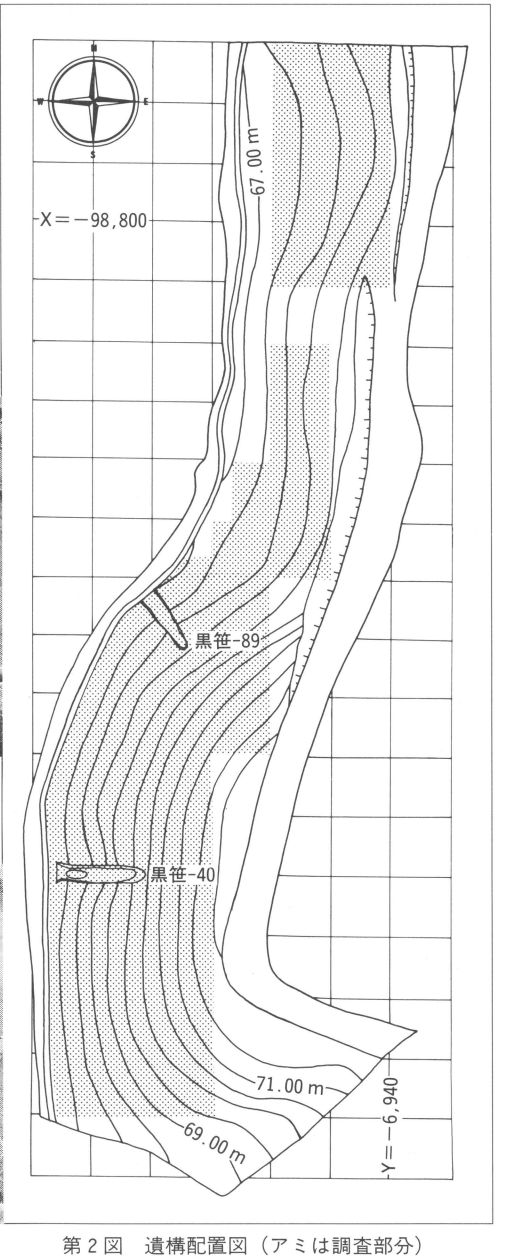
黒笹40号窯は現存長６ｍ40㎝、最大幅１ｍ60㎝を測る。焚口部分に長さ１ｍ80㎝、幅82㎝、深さ37㎝の舟底ピットがあり、底は赤褐色に焼けていた。焚口から煙出しまで比較的よく残っており、床面傾斜は中央で29度を測る。北側の中央部分では蛇腹様を呈した窯壁が残っていた。灰原部分が水田化されており、今回水田にトレンチを入れたところ灰原の一部が良

好な状態で残っていることが確認でき、同時に灰原の範囲もほぼ確定できたが攪乱されている部分が多い。出土遺物には須恵器と灰釉陶器の製品があり、長頸壺、薬壺、双耳壺、細頸壺、浄瓶、杯、杯蓋、薬壺蓋、双耳壺蓋、甕、平瓶等のほか、ミニチュアの長頸壺、蓋も出土している。8世紀末から9世紀初の時期である。

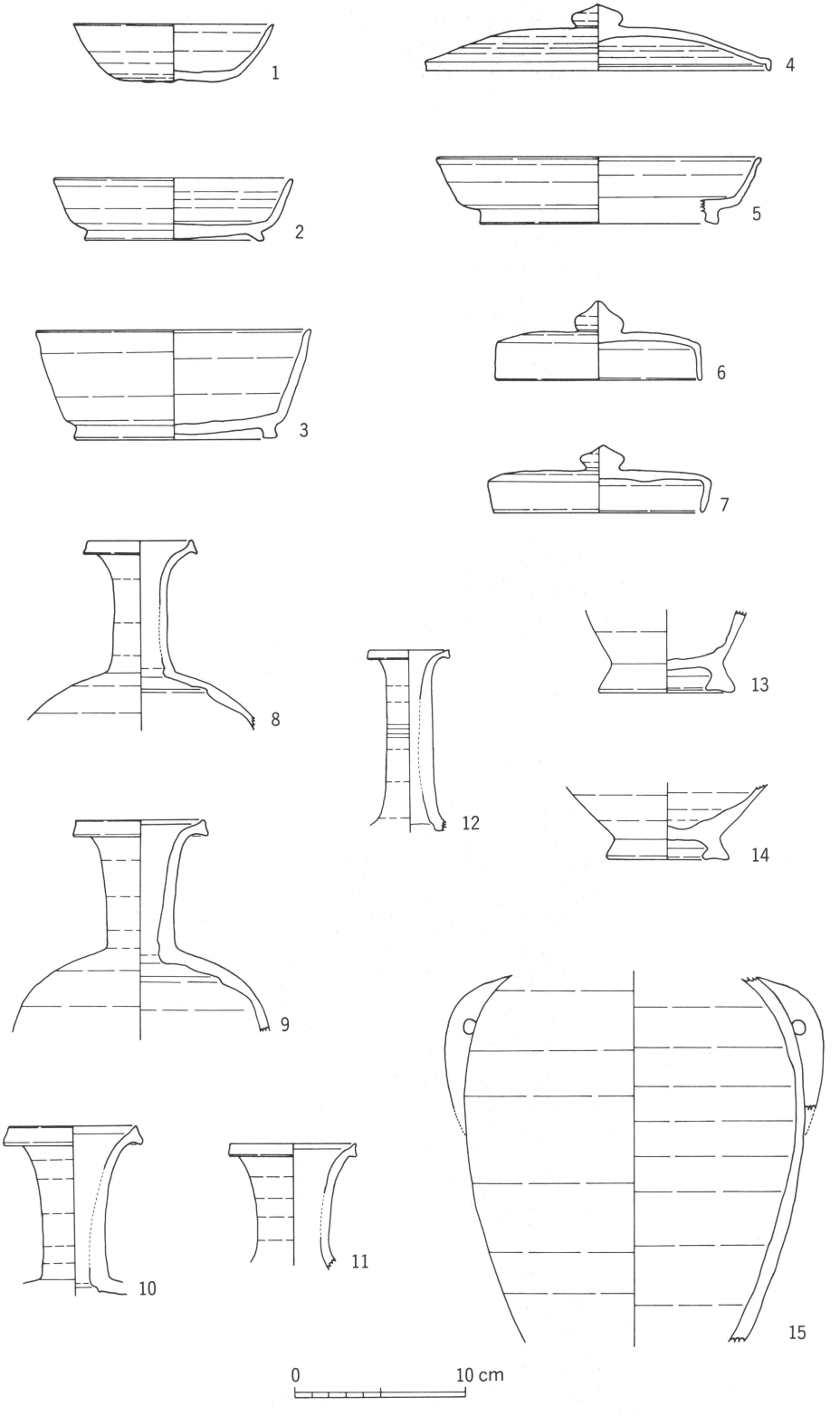
黒笹89号窯は現存長5m70cm、最大幅1m74cmを測る。窯壁の遺存状態は悪く北側の中央部分に一部残っていたのみであった。焚口には長径60cm、短径50cmの分焔柱が付設されている。窯体の断ち割りによって3回の床面が確認された。出土遺物は刷毛塗りの灰釉陶器と無釉の製品がその大部分をしめ、須恵器も少ないが出土している。花文の椀、輪花椀、皿、段皿、手付瓶、小瓶、香炉、壺等が出土している。9世紀後半の時期である。　　(小澤一弘)

黒笹89号窯体全景

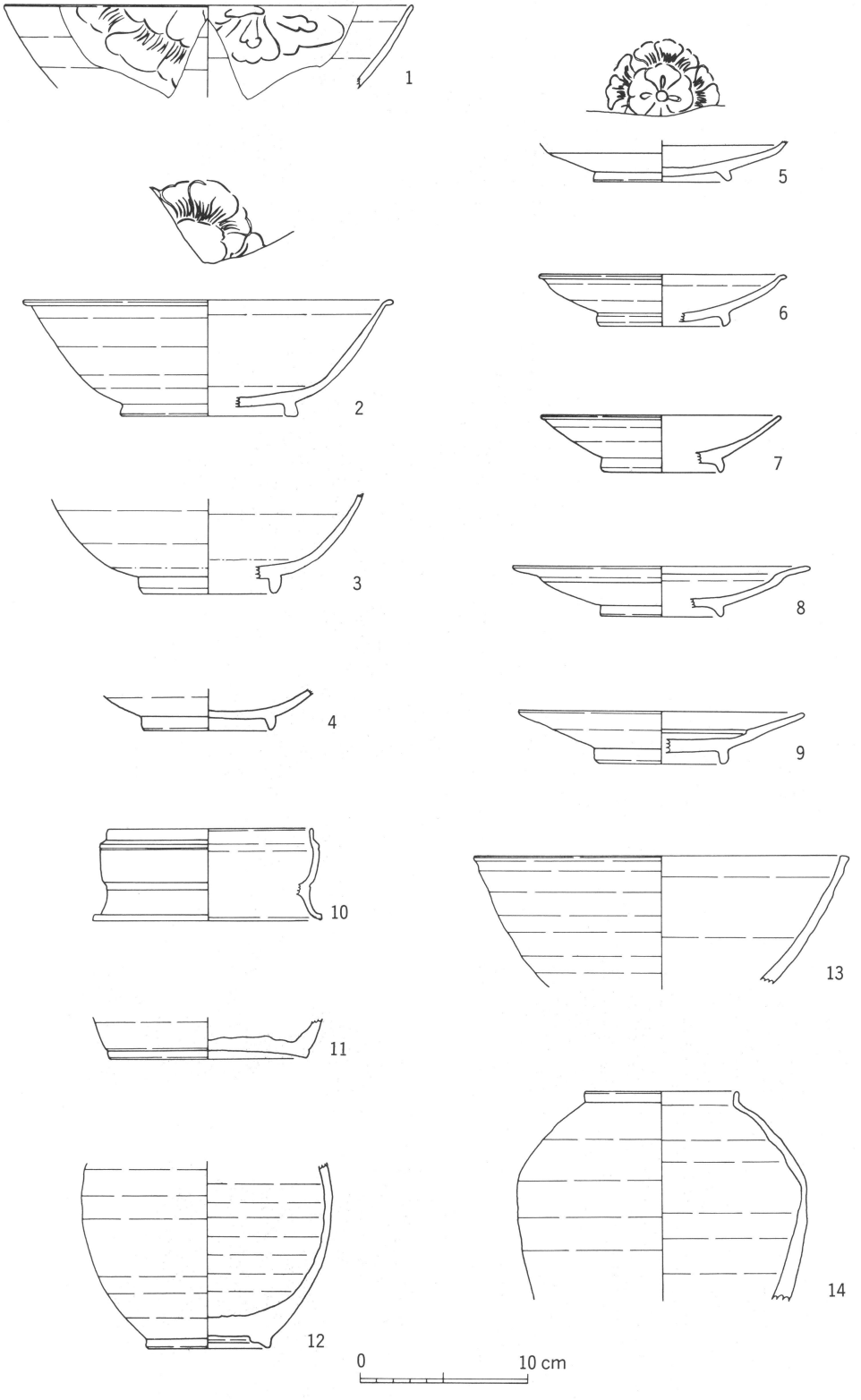
黒笹40号窯体全景



第2図　遺構配置図（アミは調査部分）



第 3 図　黒笹40号窯跡出土遺物



第 4 図　黒笹89号窯跡出土遺物